

平成 23 年度

外部評価報告書

大 学 院

工 学 部

平成 24 年 3 月

愛知工科大学

目 次

1. 外部評価報告書の刊行にあたり	1
2. 外部評価実施日程	2
3. 外部評価実施関係者	3
4. 外部評価実地調査質疑応答録	4
5. 講評（各委員からの評価と提言等）	25
6. 外部評価実地調査に対するお礼	27
愛知工科大学外部評価実施要項	28

1. 外部評価報告書の刊行にあたり

愛知工科大学長 内 田 高 峰

愛知工科大学は平成 23 年 12 月 2 日（金）に、大学はじめての「外部評価」を受けることになり、神本武征委員長他 5 名の先生方によって、本学工学部・大学院工学研究科の教育、研究、及び社会貢献の実践内容や実績について評価して頂きました。

各委員の先生方はそれぞれのお立場に立脚した貴重なご意見を述べられ、本学の教職員一同は、それらのご発言に逐一目を見開かせられ、平素の不明に気付く事柄ばかりでした。また、一方では、随所に賛意や激励も織り込んで頂き、日頃の努力が報われる思いをさせて頂くことも屡々でした。

本報告書には「外部評価委員会」でのそれらの示唆に富んだご発言や質疑応答の内容を極力忠実に再現させて頂きました。

本学教職員は今後、本報告書を常に座右において、今後の教育・研究・社会貢献など本学の諸活動に活かすべく、また、日本のすべての大学に求められている次回の「認証評価」の受審に向けて、かつ、本学の更なる発展・向上のために、極めて大きい力を発揮すると確信するものです。

評価委員の先生方が、私どもの平成 23 年度の自己点検・評価報告書を丁寧にお読み取り頂き、また、先生方の見識をもって、本学の実情を的確にご洞察して頂いたことに、改めて敬意を表しますと共に、篤く御礼を申し上げます。併せて、今後とも本学の諸活動に対して、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願いしてご挨拶と致します。

平成 24 年 3 月 15 日

2. 外部評価実地調査日程

1. 日 時 平成 23 年 12 月 2 日 (金)
2. 場 所 7 号館 9 階 7912 会議室
3. 日 程 11:00～11:25 評価委員挨拶 評価委員打合わせ
11:30～12:00 大学関係者紹介 大学紹介・現況説明 諸事項の確認
12:50～13:50 学習環境の視察
① 1 号館 1 階 1105 キャリアセンター
② 自動車棟 3 階 3351 一級課程実習場
③ テクノ夢トピア館 3 階 8731 ITS 研究所
④ 6 号館 1 階 6104CAD/CAM 実習室
⑤ 7 号館 5 階 7501 コンテンツ制作スタジオ
7509 マルチメディア実習室
13:50～15:20 大学関係者との質疑応答・意見交換
15:20～15:50 実地調査のとりまとめ
15:50～16:00 各評価委員の講評・意見
4. 提出資料 外部評価自己点検・評価報告書
講義概要 (21～23 年度版)
学生便覧 (23 年度版)
大学院履修要覧 (23 年度版)
自己評価報告書 (21 年度認証評価)

3. 外部評価実施関係者

(1) 外部評価委員

委員長	神本武征	ものづくり大学学長
委員	市川優	名古屋情報専門学校校長
委員	伊藤健一	蒲郡市民病院 CEO(最高経営責任者)
委員	澤田靖士	前 太平工業代表取締役社長
委員	中野房子	丸中(株) 代表取締役
委員	山本新	前 名城大学理工学部教授

(2) 大学出席者

内田高峰	学長 理事
小塚一宏	教授 工学部長 工学研究科長 情報メディア学科長
矢野正孝	教授 機械システム工学科長
大西正敏	教授 電子制御・ロボット工学科長
高橋義則	教授 基礎教育センター長
山本照美	教授 ものづくり工作センター長
杉浦伸明	教授 入試広報センター長
岡島健治	教授 メディア基盤センター長
茅根直樹	教授 キャリアセンター長
徳田正孝	教授 地域・産学連携センター長
中島守	教授 短期大学自動車工業学科長 一級自動車整備士養成課程統括長
野中登	教授 学務部長 (大学評価企画室長) 電子制御・ロボット工学科
奥野輝夫	大学事務局長
松本吉生	事務局庶務課長
坂倉洋治	事務局会計課長
佐野光男	事務局入試広報課長
加藤政義	事務局施設管理室長
中島利喜夫	学務部学務課長
井戸田敦	学務部キャリア支援課長

4. 外部評価実地調査質疑応答録

野中学務部長 ただ今から、愛知工科大学外部評価をいただくにあたりまして、ご挨拶および関係者の紹介をさせていただきます。

 本日の進行役を学務部長 野中 登 が務めさせていただきます。はじめに、愛知工科大学を代表しまして、学長 内田 高峰 からご挨拶をさせていただきます。

内 田 学 長 このたびは大変ご面倒な仕事を先生方をお願いしまして大変申し訳なく、また、本日は寒くなり足元の悪い中お運びをいただきまして御礼申し上げます。

 既にお届けしました自己点検・評価報告書の中にも書かせていただきましたが、今回は外部評価ということにして、認証評価については現在大学で義務付けられておりますが、幸いこちらの方は3年前ですが何とか認定を受けることができました。その時にもいろいろとご注文もいただいておりますが、少しでも何とかしようということで努力をしてみいました。その辺のところについてご先生方からご指導いただきたいと思いますが、今回は「教育」「研究」それから「社会貢献」の大学に課せられております3つの重要事項をお願いすることにしてはいますが、私学の評価となりますとやはりガバナンスのことも含めて評価をいただくことが本来の姿であります。今回はそういったこともありますが、点検内容を一応限定させていただき、評価を受けることにさせて頂いております。その辺をご理解いただきまして、本日先生方におかれましては貴重なお時間を割いていただいておりますので是非よろしくお願いいたします。

野中学務部長

神 本 委 員 長 つづきまして、外部評価委員を代表して、ものづくり大学学長 神本武征 先生からご挨拶をいただきます。

 ものづくり大学の神本でございます。ここへ来る前に評価委員で評価項目について相談しましたが、内田先生からお話がありましたように第三者評価の方は評価機構の方で既に評価を受けているとお聞きしまして、我々は既にその報告書を読ませていただいております。私の大学も評価機構から受けていますが、あくまでも文部科学省のご指導で受けなければいけないということで形式的な部分もありますけれども、今日は、そういうことではなくて「教育」「研究」「社会貢献」での分野であります。いろいろな面で問題点はあると思います。その点をそれぞれの立場で指摘して実質的にこの大学が良くなる、何かヒントを出すことができれば私達がここへ来た役割が果たせるのではないかという結論を経て来たわけ。各評価員の先生方の中からは

野中学務部長 かなり厳しい意見も出ると思いますが、しっかりと受け止めていただきたく
よろしくお願ひします。

本来であれば外部評価委員の先生方にもご挨拶いただくところですが、限
られた時間ですので大変申し訳ございませんが、ご紹介のみとさせていただきます。

神本先生の右側、市川 優 先生です。

市川先生は、学校法人名古屋学園名古屋情報専門学校の校長先生です。

市川先生のお隣、伊藤 健一 先生です。

伊藤先生は、蒲郡市民病院 CEO（最高経営責任者）です。

神本先生の左側、澤田 靖士 先生です。

澤田先生は、太平工業株式会社 前代表取締役社長です。

澤田先生のお隣、中野 房子 先生です。

中野先生は、丸中株式会社代表取締役です。

なお、山本 新 先生は、本日体調不良のためご欠席です。山本先生
からは予め書面質問をいただいておりますので、本学の現状を記述した資料
をお手もとに配布させていただきます。

それでは外部評価にかかる本学教員をご紹介させていただきます。

<本学関係者の紹介・略>

つづきまして、小塚工学部長から本学概要を簡単に紹介させていただきます。

<大学概要説明・略>

以上をもちましてご紹介を終わらせていただきます。このあと 12 時 50
分から学習環境の視察としまして、学内の施設を視ていただきます。

内田学長 <学習環境の視察・略>

神本委員長 それでは外部評価に係る質疑等についてよろしくお願ひいたします。

わかりました。それでは始めたいと思います。冒頭に学長の方からお話の
ありました、本日の評価は「教育」、「研究」、「社会貢献」の事項をメイン
にとのことでしたが、もう少し輪を広げて全て教育、研究、社会貢献に関わ
ってくるのですが、せつかく経営者の方もおられますので学生募集の問題
にも、伺っていきたいと思います。

まず、最初に、どういうところから切り出していったらよいか、私の「も
のづくり大学」のことで申しますと学生が 1,000 名ちょっと、それから 2 学
科、のところも愛知工科大学と規模も似ていますね。それから定員割れを起
こしているところも同じでございます、いろいろ対策を練っているところ

ですが、共通の話題としてディスカッションしていただきたいところです。なぜ定員割れをしているかについて、原因を調べないとなかなか対策が立たないということで、いろいろやるわけですが、これは実験をやるわけにはいかないものですから推測の域をでないところですけれども、原因はともかくもどうしたらいいかがあるわけです。一つはやはり学生募集のテクニックがありますね。学生募集がほんとうに適切に行われているのか、もう一つはやっぱり「あその大学はいい大学だ」という評判が、いい風評がないとずっと落ちていくということで即効の部分と二つがあると思うのですね。

学生募集のテクニックのところではいろいろおやりになっているでしょうし、最近はそのような方策専門会社もありますし、外からいろいろのことを聞きながら進めているでしょうし、学生募集なんていくら先生方が頭をひねったって素人の集まりですよ。そんなこと勉強したこともやったこともない、想像でやっているだけですからうまくいかない、それで外部の人の力を借りることになっていく、そうすると少しずつ良くなっていく。それから教育の面はやっぱり、即効薬はないものですから、どういう部分が欠けているのかということで、教育を一生懸命やるわけですがけれども、学生からアンケートを取るとか、満足度を聞いていることもやっていますし、フィードバックをかけながらやっていくことも、そういうことで、まず最初はですね、教育の面からいろいろディスカッションしていきたいと思います。よろしくお願ひします。

伊藤委員

私も大学で学生を指導していたこともあるし教えているものですから、問題は学生の募集のことにも関係してくるのですが、私たち病院の場合はロールモデルという役割を常に意識して教授しています。それから大学でもそうですが、こういう医者になるべくこういう人、そうすると工科大学の場合のロールモデルとなると先生方がほとんど教育者であるそういう完成された形ですので、私はロールモデルは見えないと思っています。今は社会人としてもたらされている就職のための学生というのは何を目指しているのか、というのはおそらく議論もなかったのかなということをご自己点検・評価報告書の中では思いました。

まずは、どういう形の学生を将来提供できるように育成するから、ここに在学するという形の、いわゆる形・姿という意味での格好ではなくて、こういう学生がこの卒業生の先輩だという話でもいいですし、それが逆にこういうところで学生に対して、募集する相手に対してアプローチをかけるかどうかということが一つの問題になるかなと思っています。

市川委員

我々教育に携わっている者から見ますと、この大学の教育理念というのは、最初のところに書かれている電波学園の理念で表現され、これを実現するための指導方法も具体的に述べられていると思うのです。ただそれが時代に合っているかどうかは、伊藤先生が言われたようになると思います。

伊藤委員

神本委員長

この自己点検・評価報告書に書かれている姿をイメージするとすれば、それは実物ですから、そういうふうのイメージとしてやっぱり何がいいか、例えば僕は技術者ですから話をしていると「医者になりたい。」と言う、卒業生の像をどうイメージするかということが大学というところの重要な教育であると思います。

内田学長

そういう意味では、カリキュラムだとかは他の大学とあんまり変わらないと思うのですが、見せてもらった設備は他の大学にはないりっぱなものがあるのですね。あれを活かし切れているのかなというのが一つと、それから他の大学も悩んでいるのですが「人づくり教育」、「ものづくり教育」と書いてあるのですが、書いてあるのは材料力学、物理力学とか、他の大学と同じですよ。本当にこれでいいのかと思うのです。

矢野学科長

昨年カリキュラムについてはずいぶん大学内で議論しましたので、その辺は先生方からお答をさせていただきます。

私は機械ですが、「ものづくり教育」は、おっしゃるように、機械の4力学をベースに専門基礎、これはバッチリやりたいと、それで、専門科目をやり、後は卒業研究で集大成と、いった形でやらせているのですが、一応エンジニアという形は出しているし、先ほどのどういう姿というのは、実は歴史が浅いものですから30代4代になって会社を仕切っているという、こういう姿までできていないと、こういうところが弱いと言えば弱い。工学部が発足してまだ10年、卒業生を出して7年ということですから、これから会社を担っていくところになるのかなと思っています。

それですね、ものづくり教育はステップ・バイ・ステップで行っていくことにしています。ものづくりは人づくりだと言われ、こういう感じはなきにしもあらずですが、大学生ですから、特に工学セミナー、卒業研究は3年・4年のレベルになったら自分で考えてやらせる、要するに卒業授業ではなくて卒業研究なのだから自分で企画して自分でやっていると、それが失敗してもいいと、失敗したらそれが何故かを考える、その癖を付けることが一つの人づくり教育ではないかなと思っているのですが。お答えになったかどうかわかりませんがそういう感じで教育をやっているのが現状です。

澤田委員

私の個人的な考えですが、人づくり教育というのは、いわゆる座学とか実験実習だけが人づくりなのか、そうではないと思いますね、もっと部活とかアルバイトでもいいのです。要するに社会と何らかの関わりを持つような教育の中で自然にできてくるように思っています。アルバイトにうつつを抜かしてはいけませんが、こういう経験の中で縦社会の規律や現実の厳しさを自然に身につけてくれればと思っています。

私も会社に入って40余年になるのですが、新しく入社して来る学生さんに

は確かに専門知識、これはある程度必要であるのですが、専門知識だけあればいいのかというところではないというのが私の率直なところ。ある程度の知識があればいい、一番私が感じましたのは考えてくれる学生が重要なのです。しかも突き詰めて考える学生、人に意見を聞ける学生、もっと極端なことを言いますと俺に任せろ、解決するというマインドが必要ですね。ちょっと言い過ぎかもしれませんが、超一流の専門知識なんか持ってもらうなくてもいい、そういうマインドがあれば後は会社の中で専門知識を担保します。勉強する手段だとか、どこを調べればいいのかということを知っていたら、重要なのはやはりマインドですよ。積極性があり使命感に燃える、そういう人間であればものすごく会社は喜ぶと思うのです。ですから極端なことを言えばものすごい専門知識はある、だけどやる気がない、こういう学生さんと、専門知識は“まあまあ”だけれども積極的になんでもやっていく。やる気がない学生と自らやっていく学生さんとを比べると、0点と100点ですね、私は何人も新入社員の面倒を見てきましたけれども、そういうマインドを持った人がいればいいなと思っていました。今日ここで話したいのは、大学ですから専門知識を教えるのはそれでいいのですが、できれば今話したマインドを持てるような人間の教育をどうすればいいのか考えて欲しいのです。たくさんいるから全部同じようにはいかないのですが、何人かがそういう教育をすればそのようになって、企業に行けば、企業でもびっくりしますよ。あれは他の大学から来た学生と違うというような状況ができれば、私は企業からの求人要請があると思うのです。このようにして大学教育を行って頂くのが私の長年の持論なのですが、私の出身大学にもずっと言ってきました。ただこれは“言うが易し”で、なかなか難しいのです。

実は昨年、安田講堂のマイケル・サンデル先生の講義に参加させてもらったのですが、そこで感じたことは、考えさせることが学生に対するやり方だということです。要するにテーマを作って、こういう場合はどうするか学生に投げるわけです。いろいろなことを議論させるわけです。結論は出さずに考えさせるという一つの手段ですね。その時に私の隣に学生がいたので、「こういう講義はどうだ。」と尋ねると「面白いですね。」と言うのです。これはそのまま真似をする人はいろいろあると思うのですが、日本の学生はディベートをすることには慣れていませんが、さすがハーバードの録画を見ますと日本の学生とは全然違いますね。ただ、あのままやるとかやらないとかではなくて、考えさせる学生を作るのに一つのヒントになると思いました。

最近、コロンビア大学のシーナという女性の先生がまたNHKテレビに出ていましたが実践的にやっている、そのような授業も一つのやり方かなという気がしました。

もう一つは、今日見せて頂いて素晴らしい設備を持っておられるのですが、どうも話を聞くと蒲郡を対象にされていることが多いように感じました。蒲郡だけ相手にしなくてもいいじゃないですか。就職の求人一覧をキャリアセンターで見せていただきましたが結構就職先が全国に散らばっていますね。東京もあったし、新潟も富山もありましたが、PRがあまり上手でないのかな

という気がしました。要するに学生を集めるのにどうすればよいのかということ考えたのですが、それから例えばキャリア支援などはずいぶんやられているのでしょうか。このことがどこまでPRされているのかなと思いますが、PRする相手でしょうね。予備校などともコンタクトをとれないでしょうか、予備校生にPRしてもらおうのです。

それからもう一つは、自動車を全面的に押し出しているのですが、このところが就職先を見ても多くあるのですから、もっとPRされてはどうかと思いました。就職先のこと、先ほど先生が時間が短いから解らないとおっしゃいましたけれども、もう5~6年は経っているのですから、就職した先に“取ってくれ、取ってくれ”というのは、やっておられると思うのですが、これまでこの会社で取ってどういうことになっているのか、そういう調査をやっていただいて向こうのアイデアやアドバイスを頂いてそれを改善していく、1年経ったらまた報告に行くとか、いかに相手方にファミリーになってもらえるかが重要なところですね。仲間づくりをどうやっていろいろな手段を通じてやるのかと、今やもう学生はお客さんですからカスタマーとして対応するしかない。学生を増やすのは本当に難しいことだと思うのです。でも地道にやっていくしかない、そのことをどのように広げて行くということが非常に大事なところ。ただすぐには効果が現れませんから地道にやっていくことが私は大事ではないかと思っています。

内 田 学 長

先ほど案内がありましたように電子情報から出発して情報メディア学科とロボット工学科を設置しまして、情報の方はそこそこ学生を集めているのですがロボットは残念ながら設置しましてから十分学生が集まらない状況がありまして、そこらが悩みの種なのですが、その辺のところ学科長どうですか。

大 西 学 科 長

ロボットシステム工学科が電子制御・ロボット工学科に学科名を変えた話がありましたが、もともとロボットシステム工学科を作ったのは、先ほど話がありました私共の学生の将来を考えると、どういうところに彼らを世に出していくかの話がありまして、やはり地域に貢献できる学生さんであることを全面的に考え、そのような中で世の中がロボットという流れがありまして、特に愛知県の中ではそのような産業が非常にめざましかった、そういう意味で学科を作ろうとスタートしました。

企業からみるとロボットというとメカトロ、機械屋さんの一つの分野、非常に狭い分野に捉えられ、一時就職などにも「電気ができる学生さんはいるのですか。」、或いは「電子回路は扱えるのですか。」というような企業側から要請がたくさんございました。今私共が求めているのは機械屋さん、電気屋さん、何とか屋さんというのではなくて、それらを融合したエンジニアが非常に求められているということを知っていましたので、そういう人間を実際に出そうという路線で作ったのですが、残念なことに実社会の方特に人事担当の方は機械屋さん何名、電気屋さん何名という求人しか来なかったのです。そのようなこともあって私どもにもジレンマがあり学科名を変え

神本委員長

ました。その効果は出ていまして今年などは例年になく就職が順調に進み、やはり我々のアピールの仕方がまずかったこともあると思うのですが、世の中に求めているものがある程度合致すると、やはりそこに見出すところがあるなど感じています。学生募集の方は少し低迷していますが、企業側からの見方が大分変わってきましたので、これからの学生募集の方にもいい方向に出てくるのではと、今、来年度の入試の状況を見ますと少し上がり出していますので期待しています。

伊藤委員

高校生も工業高校へ行くと機械、電気と分けていますね。だから変な名前を付けられると困りますよね。

小塚工学部長

社会では汎用性を求めていますから、汎用性に対応できるという点で先進的にやっておられることはいいことで、ただ言葉が難しくよく理解できない、特に人事というのが文系ですからさっぱり解らずに求人されることになるんだということです。

伊藤委員

私は情報メディア学科所属ですが、開学時の電子情報工学科では、電子もやり情報もやりということで、企業側からは一応は電子回路とかそういうこともわかる情報技術者ということで地場産業に取ってもらおうようにしました。一方で学生側にしますと情報好きな学生はどちらかというところ電気回路とか物理は苦手です。情報だけでやらせようとするので平成19年度に情報関係の学科を作りました。その頃に文部科学省から女子をもう少し取り込めないかとの話もありましてコンテンツ寄りも足して情報メディア学科にしたのです。ここ3年は定員の0.7以上取れています。まあ何とか学生は集まっているのですが、先ほどいわれました卒業時のイメージというものがやや見えてなくて、どうしてもアピールしきれなくて、就職の方では苦戦しています。リーマンショックのあと情報関係が、本学だけに限らず他の大学も同じように就職において苦戦しています。情報メディア学科を作った時にその学科名を「情報システム工学科」にするか「情報メディア学科」にするかずっと悩みました。実際、情報システム工学科にすると理系情報そのもので、何とか女子も集めたいなということから少しずれるなということで情報メディア学科にしたわけです。3~4年やってみますと、結局は工学部の中の情報系に高校生は見てしまうので、女子は少し増えている傾向はありますが十分に活かしきれっていません。

小塚工学部長

卒論のテーマは公開されているのですか。学生募集の時に卒論テーマそのもののイメージですよ。そういうものが外に出せるような状況なのか、卒論というのはある意味では課題があって成功だけが評価されて、失敗は評価されないですが、どういう形で失敗が評価されているのかが目にみえないと、失敗がどのように表れてくるのか、学生にしては常に成功したものだけが表れてくる評価はどうなのでしょう。

矢野学科長

伊藤委員

ホームページには、研究室の先生ごとに卒論のテーマを周知していますが、そこにたどり着くには何回かクリックしないと見えません。おっしゃるとおり、そこを押すとパッと見えるようなシステムになっていないです。

ホームページだけでなくパンフレットにも、研究室ごとに卒業研究はこうしているという記述がでています。

神本委員

言葉では電子制御系のテーマで話になると学生にはそれではなかなか理解できないことと、卒論のテーマであればもう少し具体的に表示すること。それから満足度調査には反対でして、満足度調査というのは絶対に用をなさないでして、やられるのでしたら不満調査を、何が不満であるかは改善することはやり易い、満足度を高めることはすごく難しいことです。

ちょっと話題を変えるのですが、今の話でも議論が深まってきたのですが、先ほどの話を聞いていますと、大学だからということが何回も出てきますが、うちの大学でもそうですが、「こんな難しいのを教えるのをやめろ。」と言うと、「大学だから教えるのです。」と言って難しいことを教えるのですよ。だけど今は学生の学力低下というのがこの大学でも問題になっていると思いますが、昨日、慶応大学の先生とも話をしましたが、何処の大学も学力低下なのです。大学の評価を高める一つにはできる学生とできない学生を見て、まともに卒業させるかがポイントになって来ています。昔と全然違うわけですから、だから大学をやめて幼稚園だからというまで、そこまで落ちているのです。その辺の教育ができていのかどうかをこの大学が、そのところを質問してみたいと思うのですが、一つはいろいろな面から最近の学生に何が一番欠けているのかのアンケートなんかいっぱい出ていますよ。まず、コミュニケーションがない、自主性がないとか、先ほど先生が言われたように何もないのですよ。それに対しては初年次教育というのが最近どこの大学でもありますよね。その導入状況はどうなっているのか、している、していないのなら将来どうするのかという、それからもう一つは、この大学のスタッフをみると先生方のそうそうたるスタッフが、多分研究については申し分ないと思いますが、ちゃんと教育をやっているのか、「やらない・」なんて言っていたらおかしいわけです。先生方のFD活動ですが、これも自己点検・評価報告書に出ています、あまり書いてないです。つまりFD推進というのは文科省ではもう義務化されていて、各大学ではFD推進委員会など作って組織的に対応しなければいけないことになっています。そういう先生たちの教育に対する意気込みとか取り組みですね、これがちゃんとやられておられるのか。もう一つはオフィスアワーというのが、うちの大学でもそうですが「オフィスアワーはどうなっているのか。」と言うと、「ちゃんとやっています。」、「学生は来るのか。」、「全然来ません。」、つまり大概の事はやっていることになっているのです。私はやっていることにな

野中学務部長

っているだけでなく、本当に効果があるようにならないと意味がないので、どこまでそのできない学生たちを初年次教育、FD 推進、そしてオフィスアワーなどを使って実質的に効果がとれているのか、そこがポイントになると思うのです。日本中の大学がポイントになって来ている、そういうことで今の3点を知りたいと思いますがどうですか。

まず初年次教育のことになりますが、カリキュラムでは「大学入門」という科目を設けまして大学生としての心構えとか、或いは学習の学ぶ目的など基本的なことをやっています。それから先ほどご指摘のありましたコミュニケーション能力の強化などもやっています。また、実施はなかなか大変であります。また、「キャリア形成と職業」の科目をⅠ～Ⅵまで新しく設けまして、1年の前期後期、2年の前期後期、3年の前期後期と一貫してやる形になっています。必修科目です。その中で“社会の中での自分はどうかあるべきか”、また“自分の良いところ、悪いところ”はどういうところなのかも考えさせます。また、“自分は将来どのような職業に就きたいのか”、或いは“どのような技術者になりたいのか”というようなことをその時点で、自分で考えさせます。そして今の自分と将来の自分とのギャップをその時点で考える、それをどのようにして今後埋めていったらいいのかを計画させるというキャリアマップを作成させます。それを卒業に至るまで逐次校正を加え完成度の高いものにしていこうということでやっています。その中でプレゼンテーションとかコミュニケーションなどに相当時間をかけております。授業内容によっては約3人ずつ位のグループにして全教員が担当します。

市川委員

これは新しい試みですからもう少し様子を見ないとわかりませんが、(1年生からですか。)入学した時からです。(ずっと継続することですか。)そうですね。通常は90分ですがあまり長いとダレてしまいますので45分を基準として15回を開講することでスタートしました。

FD、オフィスアワーに関しましては、基礎教育センター長の方から後ほど説明があります。

特に先生方が学力の低い学生たちに特別な対応をなされていることは、この大学はすごいなと思っています。実は私が工業高校の教員をやっていた時の生徒への対応よりも、もっときめ細かなものです。それは個々の場面で、入学してくる学生たちの学力レベルを的確に観察し、実情に合った指導がなされているからだと思います。このことが先生方に相当な負担になっていることは分かります。一人一人の学生の学習ノート(学習日誌)を付けさせる指導や、習熟別学習(従来の能力別学習)の実施、行き届いたキャリア教育など充分すぎる程の具体的指導がなされています。ここの大学の立地条件や知名度などを考えれば、ある面この様な対応をしないと大学として成り立たない心配があることも理解できます。私は申し訳ないけれども、学力の低い学生に対応する教育は一生懸命良く出来ていると思うのですが、それだ

小塚工学部長

けでは大学の宣伝になりませんね。学校の宣伝になるのは先ほど言われていたように、会社でどれだけ活躍している学生がいるか、実社会でどれだけ活躍できる学生を育てているのかが、世間に強く訴える形になると思います。それと、学校訪問に付いてですが、高校の立場では邪魔者扱いで効果はありません。訪問する側も、本当はやめたいのですが怖くてやめられない、けど他人任せの生徒募集というのは、もう限界に来ているのではないかと考えます。即効薬はないけれども長い目で見れば既に大学でやられている出前授業や、大学でいろいろな催物を計画して一人でも二人でも集める、先生方も高校から何かの要請があればすぐ出向く、地域との関係も大切にすることなどから、口コミで大学の好評価は伝わります。どこの大学でも評価の高い大学は別にして、学校評価を高めるための悩みは多分同じと思います。高校側の進路評価は、進路部長が東京大学へ何人入れたかが一番で、校長も校長会の自慢話の中で、うちの学校から何処どこの有名大学へ何人入学させたかと云うことで、愛知工科大学に何人入ったかは自慢にならない。そこら辺のところには高校の進路指導にも問題があるのです。

中野委員

議論されてきましたように、本学でも入学生の学力レベルが非常に広がってきています。情報メディア学科ではここ2年間、センター入試による入学生が増えています。1科目が70点以上の学生には奨学金を出していますが、このような優秀な学生が7~8人入学しています。このように良い学生が増えると、日頃の授業が静かで勉強する雰囲気となり、良い面がでてきました。このような学力のある学生をどう伸ばすかも非常に重要です。学力のある学生はより高いレベルの授業ができるような工夫（習熟度別）を専門科目でも取り入れることなどを考えています。

内田学長

私もこの自己点検・評価報告書を読ませていただいて、大学ってこんなに至れり尽くせりやられる、先ほどのキャリアセンターでの説明でもいろいろなセットまでもご用意なさって、そうしなければこの世の中のニーズ、親御さんや学生に対するニーズに応えていけないのかと驚きました。ただ、実際には幼児教育の時から問題があると思われるのですが、ここで修正してあげるとはもちろん大事なことです、それがこの大学の役目であるとは私は思わないですね。本当はもっともっと以前の幼児教育、親の対応の問題でも、けれど至れり尽くせりでおやりになることが、学生が自立できるのか、例えばちょっと学祭を見ただけですが日曜日のお昼からだったので何をやってみえるかよくわからなかったのですけれど、覇気が感じられませんでしたし、それと学祭を運営された人が学外のいろいろな人と話をされたとか、一切の運営を学生に任せておやりになっていけば非常にいいのだと思うのですよ。自動車学校とかの広告取りなどを。その辺のことも踏まえて読ませていただいてある意味で、“すごいな”、今はこれでなくてはいけないのかなと思ったのですが、果たしてこれが、間に合う人間を作っていくのには、どうなのかと。いろいろな人が誰でも大学へ行けるような時代になったのはいいので

すが、日本の将来を考えたとき大きく言うと、弱い日本が国際的にも下に見られるような時代になっている現状で、将来的には何かそれでいいのかなど思ったりするのですが、もう少し学生を集めなくてはいけないでしょうし、ちゃんともものになるようにして出さなくてはいけないし、大所高所からものを考えて伝える部分はどのようにするか、例えば学祭の運営を全部学生に任せておやりになっているか、アドバイスはなさると思うのですが、その辺のところです。

まず大学に入る学生が、かつての時代の大学ですと、一番初めの新制大学ができました頃の大学生は学生人口の10何%から今や70%近い60%を超えているようになってきました。そうしますと、かつてはおそらく家庭であったり会社の方でいろいろ教育をして頂いた方、つまり大学へ行かずに社会へ出た学生はいるはずですから、おそらく社会で教育されたという、そういった社会で教育された部分も全部大学へ押しつけられているという、実は、私も大学に置く身からいうとジレンマがあるのです。かつては、中学校を出て就職して社会の方で一から教育する体制があったのですが、そのような意味ではかなりの部分は大学の方へ来てしまっている、そういうジレンマがあるわけです。言われましたことはごもっともなのですが、一方では先生が言われましたように大学だからこれだけやるといった先生方の思いがあるわけですが、それはそんなことを言っているようではダメなのです。それを何とか情報を持たせて学生には来てほしい、来た学生には何とかして教育して出してやりたいというような話として連動していくものですから、なかなかそのところをどこで線を引くかということが非常に難しく悩むところがいまの大学の状況でございます。特に、最近文部科学省などが言っているのは、教育審議会などが役割分担を考えろと、お宅の大学はどういう学生というのはいろいろあるだろうが、「何処のところを教育するかを考えなさい。」ということはかなり言われています。これも、一方では初めから「うちの大学は下のレベルで教育しますよ。」と出した途端にダメになると思いますね。そうかといって「我が大学が東京大学と同レベルに並ぶのです。」と言っても、これもまったく嘘になりますから、そのところが大学に携わる者としては非常に悩んでいるところです。そのところをどのように線を引いていくのか、またどのように皆さんに理解して頂くのが非常に難しいです。一方では、非常にたくさんの親御さんたちがクレームをおっしゃるクレマーの時代でもありますし、しかし一方で、大学の状況の中でもこうやって大学を創って大学教育をするのだと、国の方針として高等教育があるわけですから、その辺は折り合いを付けながらやるしかないだろうと思っています。

基礎教育については、本学では3年目になりますが専任の基礎教育の教員として入っていただきましたので、いろいろな学生からの相談にすべて応えられる、先ほどのもちろんオフィスアワーもありますけれども先生方のところへ行くよりもまず基礎教育のところへ行きなさいと、先生からご指導して頂くそのような体制をとりましたので、うちの大学はいろんな意味で学生が

神本委員長

高橋基礎教育

かなりそういうところに行くのだと考えてはいます。しかしもっと学生の指導、体制を作りなさいと盛んに言っているのです。それから教育課程の更新ですが、カリキュラムでは今まで付けてあった科目名を全部やめて、ご覧いただくと分かりますように昔風の科目名ではなくて、もう少し具体化された科目名に工夫はしているところです。でも、一方では先ほども話がありましたように大学ではないじゃないかという話もありますし、いろいろ難しいですね。

ぜひ基礎教育センターのお話を聞かせてください。

多分、基礎教育に話題が集中してくると思っていました。私は大学と企業に長くいましたので、両方の立場で考えています。ここへ来た当初は、学生たちにとって授業が難しく解らなくなったら基礎教育センターがあるとの意識だったのです。しかし先ほども言われましたが、要するに下の方のレベルでは初年次教育はおろか幼年次教育、そこから出発しないと仕方がないのが現実なのだと思います。

現実を見ますと、ここで義務教育レベルの内容をもう一度再確認する必要がある層と、高等学校レベルの内容までを再確認する層と、それから大学レベルの教育について行ける層、という3つがあります。それぞれのレベル層の中で、「自分でやりなさい。」と言っても今の人はやらないようです。それが現実です。その原因を上流側に求めて行く、つまり高等学校、中学校の教育に求めて行っても解決にはならない、実態が既にそういう状態ですから。では、そのような学生たちに対しては、新しい知識を教えることは勿論大切ですが、習熟度下位の方の学生たちには新しい知識よりもマインドです、マインドを強化してあげることが大事であると思っています。例えば、数学なんかでも、解析学とか代数学の解法を説明して、それではこの問題を解きなさいと言ってチャレンジしてもらいますが、「解く段階でいろいろ考えるでしょう、考えることが非常に大事であって、解けたことは嬉しいことだけど、今はそんなに大事なことではない、社会でこんな微分とか積分は役に立つかといったら役に立たない、しかしそれをやるために今までより、もう少し余分に考えたこと、それが役に立つのだから、今はそういう訓練を数学という手段を通じてやっているのだよ。」といつも言っています。数学としての意味合いは理解が進み成績が少しずつ上がって来るにつれて分かってくるものです。筆記試験で、例えば、先生から100点もらった、或いは減点されたとかで一喜一憂しているのですが、目的は高得点をとらせることには置いていません、もともと易しいレベルに設定しております。目的は何といてもその人の整理・整頓能力を高めることです。企業でいえば整理・整頓・清潔・清掃、躰ですね、躰は脇に置くとして、整理・整頓、これは物を整理・整頓することもあります、頭の中を整理・整頓することを授業で訓練している、大学はその期間だよというように教えています。それを少しずつ彼らがものにしていけば、知識はそれほどでもなくても考える力や解決能力は大きくエ

ンカレッジできるのではと思っています。

神本委員長

高橋基礎教育
センター長

神本委員長

それからオフィスアワーは実効的かということですが、おおよそ80%の先生が自分の部屋の入口にオフィスアワーの設定時間を貼っておりますが、実効的かどうかは定量的には把握していません。私自身はいつも基礎教育センターで仕事をしていますし、個別指導という形で一人一人と対話しながらやっていて、一番実態をよく知っていると思いますが、前期は忙しく平均して週に10コマ相当を指導に費やしているのが実態です。センターへ来る学生たちは、一人平均1時間位ですがみっちり対話して、それでも解らなければまた来るというリピータの学生もいるし、或いは友達と連れ立ってくる学生もいるし、それから何度言っても解らなくて泣き出しそうな学生もいる、そういったいろいろなことがあります。また、幼年次教育について実態がどうかということ、1メートルが1,000ミリだと解らないレベルから出発する学生もいますし、時間の換算ができないという学生、或いは時速が分速、秒速に直せない学生たちがざらにいるわけです。そういう学生たちに対しては現状の知識に合わせて丁寧に指導し、そこから秒速に直ったね、良かったね、ということで、その学生は気分良く帰るというような状態です。そういうレベルの学生から、授業内容のワンポイントが解らなかつたからセンターへ来た学生たち、それから大学院の受験準備をしたいので3、4年生になってから来る習熟度上位の学生など、3層の習熟度レベルで対応してやっています。それが実態です。

学生は1,000人位いるわけですね。基礎教育センターには先生以外には何人かはおられるのですか。

常駐しているのは私一人です。ですから私が自然系ほとんどの科目についてやっています。

高橋基礎教育
センター長

神本委員長

わかりました。先生一人でお忙しいかもしれませんが、全体からみたら先生のところに来る学生はほんの少しでしょう。低レベルの学生が最近をよくいるのですが、だけどものすごくできない学生が3分の1、残りは真ん中辺だと、どの辺に照準を合わせて授業やっついていいのかわからない話がどこの大学でもあるわけですよ。下の方の3分の1をどうするかという話なんですよ。もちろん先生の所でできるだけやっついていっしやるのですが、やはりオフィスアワーを有効に使わなきゃいけないと思っています。ところが学生にオフィスアワーやっついてますよと、ちゃんと時間表を作って貼ってあるのですが、なかなか来ないと、最近いろいろな大学から送ってくるレポートなど見ていると、待っていてはだめだから授業やっついて出来ない学生はいっぱいいる、ダメな学生は引っ張って来る、連れてきて補習をやらなければダメだということまで書いてある、だからそこまでやらなければいけないのかなと情けなくなりますが、どうなのでしょう。

大西学科長

それに関しては、センターでもやっています、1年生の最初の時に数学のプレメントテストを行いまして成績下位の方の学生をピックアップして、担任の先生に「この学生はいついつに補習授業をやるから半ば強制的に出さしてほしい。」とっています。

授業について来れなかった学生は退学していくのですね。退学率何%か知りませんが10%、20%出てくるわけですよ、そうするとやめた連中というのは高校へ行ってあの大学は良くない、そういうことが起こるらしいのです。風評被害で学生募集に非常に悪い影響を与えるという、最近“退学防止研究所”なんて出来てやっているわけですよ。次から次へといろいろなものが出てきて大変なものですね。

学生には最近非常にレベル差があって、実は私のところの電子制御・ロボット工学科は学生数が少ないということを利用して、学生一人一人を見えるチャンスが増えたので、そういう意味でいろいろな取組をしてきました。最近どこの大学でも始められているポートフォリオ、これは私どものねらいというのは学生とマンツーマンで教員が面倒をみよう、先ほどの学習日誌はマンツーマンではないのですね。教員一人或いは二人の教員が学生一人一人を見る、学科の教員全員が一人一人の学生を見ることで、学生はあの先生は知るがあの先生は知らないとか、授業に出た人は知っていますが他の先生は全然知らない、そのようなことがあるので一つの取り組みとしてスタートして実績3年目になります。学生に毎週自分の授業に参加したとか、その週でどういう世の中の動きがあったのかちょっと書いて頂くとか、それから先生に対しての質問なり自分の悩んでいること、そういうものを毎週一人一人みることをはじめました。そういうことで学生一人一人の状況を全教員が把握するようになる、これは教員にとって非常に大変な仕事で、本来の授業或いは研究をやるのはなかなか取りにくいですが、私どものカリキュラムはびっしり詰まっていますのでこの時間さえ取るのが難しいのですが、昼休みの一部を学生にも協力して頂いてやっていることで、学生に対してはちゃんと見てあげることが非常に大切です。ただこの時間を大学のカリキュラムにどう入れて行くかが難しい、先ほど申しましたように学生が少ないことにより逆にこういうことができ、非常に成果が出ています。

澤田委員

大学が中学校、高等学校の補助授業をやっている。補助授業が過剰だというご意見は正論だと思います。補助授業をやめればどうということが起こるか、それを先ほどから考えていました。多分補助授業をしてもらわない学生さんは、社会に出てから補助授業をもらった人と比べて更に不幸な人生を歩むのではないか、世の中にほうり出されたらまともに生きていけない、不幸だ、そういうことを考えられて補助授業をやっておられるのではと思うので、非常に感銘して聞いていました。世の中も変わったなど、私の世代から言うとなんて勝手にやれという時代ですよ。今はそうではないのですね。

伊藤委員

内田学長 もう一つはそういうことをやらないで今のままで就職したとしますよね、そうすると会社の中ではやはり活躍できないでしょう。認めてもらえないので

伊藤委員 すから。そうすると本人も不幸だし、会社も不幸だ。その評判から「この大学から次は取らないですよ。」というようなことになる。

内田学長 三つ目は、今や18歳人口は200万人ぐらいだったのが、今や100万人ちょっとらしい（最後は60万まで行くらしい）、それが全部大学へ行くのではなく今大学へ行くのは6割7割でしょう、そうすると世に言われている全入時代（今がそういう時代です）、もっとそうなる、そのようなことを考えるとやっておられることに敬服しますし、続けて頂きたいと思います。

小塚工学部長 今、細かくやっておられることに対し、逆にやられる先生方に対する大学の評価ということに何か“ペイ”される場所があるのでしょうか。要は、教育をしていることに対する大学当局の評価があるかどうかということです。

市川委員 評価制度については、若干学園全体で見直しをやっていまして、大学の場合はポイント制を考えようということで、いろいろな業務に対してポイントを考えてそれで評価を考えようということですが、実は昨年あたりからはじめましてまだ今年は試行の段階の状況でございまして、まだその制度ができているかという、そうはなっていません。

評価部分の何かないところですか。

何分、学生数の問題で経費超過となっていますので、そこらへんも含めてどうしても抑え気味になりますから、なかなかそういうことで差を付けられるかどうか難しいとは思いますが、しかし、学園全体で取り組みましてその中の一環として大学の場合はポイント制を考えようという形で動いております。

私どもの大学は、研究面中心で評価する制度ではないものですから、教育面それから管理・運営面、社会貢献面などいろんな面からみて行こうということです。

今日、学内の見学の際に、学生さんが挨拶してくれるのです。感激しますね。自分が大学生のときに他所から来た人たちに挨拶したか、したことなかった、そこがこの大学の現状をよく表していると思いますね。本当に従順で素直でそれで言われたことはできるのだけれども、それじゃ今度は先生が言われるように社会に出てから強く育つか、今の時代は人間性だけでは通用しない。ここのところのジレンマがこの大学なのかなと思うのです。ただ怖いのが、言われたように辞めた学生の風評被害ですね。一時ですね、こんな話はしてはいけないのかも知れませんが、私が現職の県立教員の頃、退学者

大西委員

を出すと県教委から校長が呼びつけられて、「何で辞めさせた。」とのお叱りがあると聞きました。愛知県は全国1位の退学者が少ない県でした。その時、我々が言っていたのは要するに高校を退学する生徒を出すということは、責任者のいない子供たちを町の中に放り出すことで、一番困るのは警察で、それを防止するために県教委は県警と結託をして退学者を意図的に止めているのではないかと、そういう極論まで話していたことがあります。また、そうではなくて税金で雇っている教員が退学者を出すということは、企業でいえば御積廻を作ることと同じことで、教育長が県議会で追及されるからだと話していました。とにかく退学者は出してはいけないと、校長は退学防止に必死でしたが、一般教員は退学者を出すことが重大な事だと捉えていませんでした。現実問題として、退学した学生は必ず元の学校へ戻ります。なぜか、それは相談の場所や自分の居場所がない。自分の進路や就職を相談するには、学校の進路の先生のところへ行って泣きつく、その時は学校生活での自分に都合の良い事実だけを話します。風評被害の防止には、退学した学生の退学後のフォローアップが大事なのです。

小塚工学部長

神本委員長

それと、生徒募集に良い学生を旨く活用する。女子学生なんかはできたら私は夏休みに母校へ帰して、私の大学は今こんな楽しい大学ですよとか、進路の状況なども報告させ、更に4年生や院生にも、少し生徒募集に母校へ行ってもらうことも大事ではないかと思えます。高校の先生はなかなか学校訪問者の話は聞いてくれませんが、卒業生の話は必ず聞いてくれます。

内田学長

私のところの学科では、夏休みに学生が郷里に帰る時に、必ず学校のパンフレットだとかその学生の載っている写真を持たせて母校に行きなさいという指導をしています。「学校のパンフレットを持って行きなさい。」と言うことは自分の何かアクティビティが少し自慢できるような題材を持って行かせると喜ぶますね。

野中学務部長

神本委員長

高校訪問で進路の先生に会ったりしますと、最近卒業生が来たとかの話聞きます。その学生が元気にしていることを向こうの先生に言ってもらえると、元気な顔して行ってくれたことが分かりほっとします。高校を出て本学に入学し在校生が元気に頑張ってくれていることを出身校に帰って先生と話をすると、そういうことが非常に重要なことです。そこで不満たらたら言われると困るのですが。

内田学長

野中学務部長

神本委員長

ちょっといいですか。学生がちょっとおとなしいのではないかというお話もありましたが、それと学生は勉強だけではなくてパーソナリティを、大学によってはあれも教えなきゃ、これも教えなきゃとカリキュラムがビッシリになっていて学生に余裕がないということもあつたりしますが、この大学のカリキュラムは月曜から金曜まで講義などはきちんと履修できるようになっていますか。

野中学務部長

神本委員長

矢野学科長

単位の制限はしていますが、時間割の編成上はどうですか。

キャップ制をとっています。

それはあまり単位を取りすぎないように、勉強ばかりあまりやるなど。

そういうことですね。

神本委員長

カリキュラム上はセットとしますが、選択科目がありますから。

澤田委員長

ただね、今の学生は選択制になっているといっても、あると全部取ってしまうことがあります。

野中学務部長

キャップ制で制限していますので。

神本委員長

制限しているといっても今の学生は選べと言ってもなかなか選ぶ能力がない、むしろ最初からカリキュラムを少し楽にして124単位で卒業できるわけですね。150も170も用意する必要はないのではないかと、意図的に隙間を作ってやって、「水曜日の午後は空けとくからみんな部活をやりなさい。」とか、少し工夫してやった方が、友達とコミュニケーション能力もできるわけだし、という風にちょっと思っているわけです。

矢野学科長

神本委員長

非常にいいことだと思います。私も前から言っていたのですが、企業で例えれば、水曜日に早帰りがあるように、大学も3限目までの日を作って活発に部活動を推奨するという意義あることではないかと感じています。

先生も学生もハッピーなのですよ。

出席をとるのですか。

市川委員

出席はとります。

取らなければ出なくなります。全学が何曜日の何時間目が空いているとやらないと部活なんか出来ないのですよ。バラバラだとやりにくいからダメなんですよ。

神本委員長

特に運動部では4限までやると後期は屋外活動ができなくなり、冬だったら暗いのです。グラウンドには照明設備はありますが。

伊藤委員

私もカリキュラムのスリム化を今まで何度も責任をもってやったことがあるのですが、なぜか先生たちは「授業を減らしたい。」と言うのに「あなた

神本委員長

の授業を減らしなさい。」と言うと授業を減らすことは自分たちの存在価値を疑われることと思って、どうもおかしくて変なものです。とにかく一律に減らすとかですね、もう一度見直して、難しすぎるのはちょっとカットして最低限これだけはきちっとやると、それで余裕を持たせて遊ばせるとするというのが一つのやり方かなと思います。

矢野学科長

18歳から22歳のあの時期に、働かずに大した苦勞も無くブラブラしていることが、その人の人生にとってプラスになるのかなと考えられますが、私はプラスになると思っています。そういう意味で先生が言うておられるように余裕を持たしてあげることも大事で、自分の学生時代を考えてみても麻雀ばかりやっていて、それが結構よい仲間作りに繋がることもあったと思っています。

中野委員

麻雀は結構いいところもあるのです。

私は専門学校の校長をやっているのですが、今の話をきいて看護学生は目一杯やっても足りない、しないと卒業できない、ライセンスが受けられないです。そこらのところとの兼ね合いで自由度というのが自分たちの責任で自由にできないということですね。その間でもその余暇を作れということですね。そこら辺がどこまでというのがなかなか難しいでしょうね。

若いころは発散する場所があってもいいような気がしますね。特に、ここはちょっと街から離れていますし、部活なんて言っても授業が終わったらすぐ帰ってしまうのではないのですか。

ここは風光明媚でいいところですが、休講になったら昔だったら、外へ出て麻雀やろかとか雀荘がすぐ近くにあり環境は整っていたのですが、ここは何もありません。

神本委員長

蒲郡の地元の市民としては、ここに短大が開学したのは昭和62年ですか、あの時の行政の想いとか色々なことがあって、私はあの時は市議員でなかったのですが、後で聞いたのですが、やっぱり蒲郡が若い人にとって魅力のあるまちにしなければいけないと盛んに言っているのですが、なかなかありません。先ほどお話がありましたように愛知大学さんが笹島に校舎を建てられますが、若い人は都会志向もあり、蒲郡に対する不満を取り除いていただきたいなど、それを行政でも誰でもいいのですが、若い人に満足してもらえない行動が伴っていないのです。私の娘たちは北里だったのですが、上の娘は畜産学科で2年生から青森の十和田市でした。もっと何もない所でした。こんなところに娘を置いて行っているのかな、住めば都かなと思いつつ、私はその時に市の方や学校にお願いして、とにかく市のイベントとか何かあったら学生さんに声かけてくれと。十和田市は本当に田舎で何もなく、北里大学

内田学長

神本委員長 があることでかなり潤っていたのですね。そういった部分でお互いに協調して学生たちにもいい学生時代が過ごせるよう十和田に行ってよかったなと思えるような、そういうことをお願いする手紙を書いたのです。蒲郡に対しては是非そういった具体的な学生さんの思いが、市や商工会議所とか、蒲郡だけではないのですね。岡崎さんとのものづくりをやっておられるし、この地域に対する何かをして頂けるともってここの大学の意義が出てくるのではと思います。今日拝見させていただいて私達蒲郡市民からどのような存在か。近くて遠い存在でなかなか市民も何うこともありませんし、これだけの設備を持っておられて蒲郡の子も来ていると、何かもうちょっと密にしていけるような、そうすると蒲郡市民も「うちには大学があって、こういう設備があって、こういういい学生がいて、こうなのですよ。」と言えらると思うのです。

内田学長

中野委員 ちよつと今のことで話を伺おうと思っていたのですが、自己点検・評価報告書を見ると地域の組織が主催する事業のリストが出ているのですが、どの程度この大学がここに関与しているのかあまり見えなかったのですが。

小塚工学部長 ほとんどの事業が本学の主催でやっているのですが。

伊藤委員 かなりやっているような気はしますけど。

小塚工学部長 先ほども言いましたように、どうしてもそうしたことをおやりになれる先生と、そうでない先生に分かれてしまうのですね。集中化して、ある先生はいつも引っ張りだこだし、ある先生はそんなことは関わらない、その辺が非常に悩ましいですね。ちよつと私の感じでは先生方が少し過密になっているところもありまして、それがあまりそうでない先生方に管理側としては何か考えなければと、だからいろいろとやっていただいて、大学としては規模が小さいところもありますが、ここ数年は市との関係はいろいろと作っていただきましたので、市からもいろいろなご要望もありますし、見学に来ていただくことも、少しずつ増えていますのでこれからも広められたらなと思っています。

伊藤委員 例えば、「広報蒲郡」がありますが、私は蒲郡市に大学へは何部でもいいからなるべくたくさん置かしていただいて、興味のある学生さんが蒲郡にこんなイベントがある、こんなことがある、それではちよつと見てみようとか、そのような広報をやってくれと言ったのですが、この間も企画に話に行ったらこちらには1部か2部しか広報誌を持って来ていない、それはお申し出がないからだ、海陽学園さんは40部ぐらいほしいと言われて持っている、だからお互いに、行政というのは言われなきや動かない部分があるのです。ホールのところとかにちよつと置いて頂いて、学生さんが蒲郡でこんなことをやっているのだなという部分を少しでも、それがお互いのふれ

伊藤委員 あいの場にもなりますし、何かさりげなくてもきっかけになるかなと思います。

中野委員

つい数日前の話ですが、蒲郡市生命の海科学館が改装されるそうで、3階の一角に展示用スペースを設けますが「出しませんか。」との話がありました。

神本委員長

これまで月面ローバなどを展示しているのですが、駅前ですからこんないい話はないということで、来週打ち合わせることにしました。工学部や短大の特徴をアピールするパネルとか、来た人がボタンを押すとパッと見せられるような展示物などを用意して蒲郡の方々と繋がりをもって活動して行こうと思っています。それから今年は小沢先生と杉森先生で蒲郡市生命の海科学館と連携してサイエンスパートナーシップ共同プロジェクト「数式をアートしよう」という教育プログラムを開講しました。

内田学長

大学の外に設けた部屋を豊橋技術科学大学では駅前に持っていますね。イベントとか勉強会とかそこでやっていますが、この部屋はそういう風には使えるのですか。

来週に来学して頂き相談をします。改修が来年になりますが打ち合わせをさせて頂いてどういう使い方をするか具体的に進める予定です。

私は写真好きで「フォトサークル」の顧問をしていますが、写真展なども開催できれば学生たちにとっても良い効果が表れるようにと考えています。

駅前であればそういう使い方ができるようにしたいですね。

今、議会でも話題になっているので、総務省で予算をいただいて作った建物であることだし、蒲郡市生命の海科学館は情報ネットワークセンターですからうまくやっていただいて市民にとっても外部の方にとってもアピールできるようにお願いしたいですね。

時間もオーバーしましたのでこの辺で終わりたいと思いますがよろしいでしょうか。

ありがとうございました。

5. 講評（各委員からの評価と提言等）

神本委員長

委員で総括しました。

いろいろディスカッションしたところですが、ディスカッションした内容はテープをまとめて頂くとして、最後に一言ずつ委員の皆さんから言われたことをご紹介しますことで総括としたいと思います。

伊藤先生の方からのコメントで、自動車中心にやってきているのだけれども、これからも自動車がいいのか、もっと別の観点でいえばこれからの高齢化社会における医療・介護の新しい分野のことも視野に入れた方が今後の発展に対していいのではないかというコメントをいただきました。

市川先生からは、低学力の学生に対することはよくやっていらっしゃるが、それはそれでいいのですが、出来る学生をどうやって伸ばすかこれをしっかりやっていただきたい。その出来る学生を看板学生にしてこの大学の広報を進めて頂きたいとのことでした。

私(神本委員長) はですね、卒業研究のやり方について追加でコメントしたのですが、その学生に自由にやらせるという発想があるのですが、学生はもともと学力がないので、学力がないのに自由にやらせたってロクなものが出来ないと、むしろ先生方がやっておられる最先端の研究を核にしてその部分でやれる部分をぎりぎりのところまで高いターゲットを持たせて引っ張り上げると、そして教育効果も上がるし、先生の研究業績も上げる、そのようなやり方の方がよろしいのではないかというコメントとしました。

中野先生については、先ほど正論をおっしゃいましたけれども、ああいう気持ちを忘れてはいけないと、出来ない学生は一生懸命でレベルアップしてやるのだけれども、やはりあまり甘やかさないとか厳しい部分もあっていいのではないか、のことも理解してほしいとのことでした。

澤田先生は、この大学の設備も素晴らしいし先端的なところもみられるが経営的に大変厳しいのではないかと、学生数が減っていることは、やはりいろいろ対策は講じておられるけれども先生方、全員が危機感を持って難局に当たってほしい、危機感を共有してやるのが重要ではないかというコメントをいただいたところです。

澤田委員

後は、学校の PR を学校の評判をどうやっていくかが、もう少し必要ではないでしょうか。

中野委員

先ほども申しましたように、せっかく蒲郡に設置していただいた大学ですので蒲郡との関係も強くして頂いて蒲郡に根ざして大学があつてよかつたな、変な話ですが、新城さんに大谷大学さんが撤退なさるどうかの話がございまして、絶対ここからですね、名古屋でなければダメだとおっしゃらないように蒲郡も頑張りたいと私は思っていますので、またどしどし蒲郡にも要望、学生さんからの言葉、気持ちがこうなんだよ、と言って頂くと、一番痛いというかよく通じるのではないかと思いますので是非ともお願いしたいと思っております。

神本委員長

先ほど言っておられましたが知名度はちょっと足りないし PR をもっとやっていただきたい。総合的にみるといいところがたくさんあるので、きめ細かな指導をやっていて学生一人一人の満足度は相当高いのではないかなと、そのところは非常に高い評価となると思います。以上です。

6. 外部評価実地調査に対するお礼

本日は長時間にわたりましていろいろとご議論いただきましてありがとうございました。ただ今ご指摘いただいたことを今後に生かしていきたいと思っております。具体的にはいろいろな対策を講じて、計画中のものもたくさんございますので、その辺のところも考えながらお許しをいただきたいと思っています。

今日お話しができませんでしたが、大学院が発足しましてドクターの学位を昨年1名、それから修士につきましては既に4年目に入っている状況でございます。卒論の題名のこともありましたが修士論文の題名等についてどういう研究をしているのかアピールしながらこれを何とか生かしていきたいと思えます。

従来から本学の大学生の中には、他の大学院に進学してさらに勉学を伸ばしているものもございいます。私は常々皆さんに申し上げているのですが、ここの卒業生が本学の教員として“教授”なる日が是非少しでも早く来てほしいと思いながら考えるところもございいます。そういった意味ではぜひ優秀な学生をさらに育てて、本学の先生方の中に卒業生が入ってくることが本当に理想だと思っております。一方では先ほどの話でもございましたけれども、やはり蒲郡の地で教育する以上は、やはりある意味では、私もこちらへ来てびっくりしたのですが高校時代ほとんど面倒をみてもらった経験がないといった学生も本学で先生方のお世話になりますと、はじめて先生方のそういったところに触れて勉学意欲を増して非常に優秀な学生として育てていった話も聞いておきまして、大学の役割というのはいろいろなところに実はございまして、そういったことを少しずつ整理しながら、どのようにこの大学は役割を果たしていく必要があるのかなと感じているところでございいます。

今後とも是非皆様方におかれましても、また本学の様子につきましても、少し関心を持って頂きまして折に触れてご指導やご鞭撻を頂ければ幸いです。

本日は長時間にわたりありがとうございました。

愛知工科大学自己点検・評価委員会

委員長（学長） 内 田 高 峰

愛知工科大学外部評価実施要項

(趣旨)

第1 この実施要項は、愛知工科大学自己点検評価に関する規程第10条第3項に基づき、点検評価についての学識経験者における検証（以下「外部評価」という。）を実施するために必要な事項を定める。

(外部評価委員会)

第2 本学に外部評価を実施するため、愛知工科大学外部評価委員会（以下「外部評価委員会」という。）を置く。

(組織)

第3 外部評価委員会は、本学教職員以外の大学の教育研究並びに運営に関し広くかつ高い見識を有する者を、次に掲げる分野から数名を選んで組織するものとする。

- 一 大学関係者
- 二 研究機関（民間を含む）の研究者等
- 三 企業の経営者等
- 四 行政に係る者等

2 前項の委員は、学長が選任し委嘱する。

(委員長)

第4 外部評価委員会に委員長を置き、学長が委嘱した者とする。

- 一 委員長は、委員会を招集しその議長となる。
- 二 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職を代行する。

(外部評価の実施)

第5 外部評価の実施は、学長が必要と認めたときに行うものとする。

2 外部評価委員会は、評価の結果を学長に報告するものとする。

(外部評価実施組織等)

第6 外部評価に関する次に掲げる事項は、愛知工科大学自己点検・評価委員会（以下「自己点検・評価委員会」という。）がその業務を担当する。

- 一 外部評価の具体的な日程に関する事。
- 二 外部評価の実施内容及び方法に関する事。
- 三 外部評価実施に必要な資料の作成に関する事。
- 四 外部評価委員会が行う評価項目に対する現地調査への対応に関する事。
- 五 その他外部評価の実施に関する事。

2 前項各号の実施に関し、自己点検・評価委員会委員長が必要と認めたときは、当該委員会委員として委嘱し加えることができるものとする。

(庶務)

第7 外部評価及び外部評価委員会に関する庶務は、庶務課において処理する。

(報酬等)

第8 第3第1項各号に掲げる委員の報酬等に関し必要な事項は、別に定めた支給基準によるものとする。

(補則)

第9 この要項に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は別に定める。

この要項は、平成23年4月1日から適用する。

学校法人 電波学園
愛知工科大学

〒443-0047 愛知県蒲郡市西迫町馬乗 50-2 学務課 TEL (0533) 95-1131 FAX (0533) 68-0352